

陸九淵と陳亮 —— その発想の共通性 ——

The Philosophies of Lu Jiuyuan and Chen Liang: Common Underlying Themes

中 嶋 諒

Ryo Nakajima

日本語要旨

本稿は中国南宋時代の思想家、陸九淵と陳亮に焦点をあてて論じたものである。陸九淵と陳亮はともに、ほぼ同時期に朱熹と論争を繰り広げた。それにもかかわらず従来の研究では、陸九淵は自らの心の内面を、陳亮は外界の事象（歴史や現実問題）を語ることを重視した正反対の思想の持ち主であると位置づけられ、相互に関連づけて論じられることはあまりなかった。それに対して本稿では、両者の心や理、道と聖人に関する考へ方に着目した。彼らはともに心や理、道を普遍的、通時的なものにとらえ、それに基づき、後世の人間と古の聖人との一貫性を強調していた。このような立場にたつゆえに、聖人との境界が曖昧になり、それに至るべく学問修養をする意味が薄れてしまう。そして結果として、軽々しく聖人到達を口にしない朱熹との対立が生じることとなったのである。

ところで何故、陸九淵と陳亮が以上のような考えを持つに至ったかといえ、それは心や理、道における聖人との一貫性

を強調することで、それを踏み外してしまふことへ意識を先鋭化させる効果を狙ったためであった。両者の示す興味関心は異なるものの、彼らの思想には以上のような共通する発想があったのである。

1. はじめに

中国南宋時代の思想は、一般的に朱熹（一一三〇～一二〇〇）の学（朱子学）を中心に語られるが、同時に陸九淵（一一三九～一一九二）や陳亮（一一四三～一一九五）らの学も隆盛を極めていた。このうち陸九淵は自己の心の内面に、陳亮は歴史や現実問題に偏向したとされ、そのいずれも批判し、均衡を図ったのが朱熹であったと見なされる。すなわち陸九淵と陳亮は、朱熹を挟んであるいは心の内面を、あるいは外界の事象を語ることに傾斜した、正反対の方向性を持った思想の持ち主だと図式化されるわけである。

しかしその一方で陸九淵の出身地であり、その教育の拠点で

もあつた江西の地には、当時既に永康陳亮の学が盛んであつたという¹。また時に浙江の学の伝統は、陸九淵の門弟（楊簡や袁燮）らによる心学と、陳亮と親交のあつた永嘉の諸氏（薛季宣や葉適）らに代表される史学の融合だと言われることがある²。これらの議論が妥当であるか否かは置くが、陸九淵と陳亮の思想には何らかの親和性があり、相互に連結する要素を内包していたと考えるのは、あながち見当違いではあるまい。そもそも陸九淵と陳亮は、朱熹の論敵の代表格としてその名が知られる。両者はほぼ同時期に朱熹と論争を繰り広げたが、それにもかかわらず、彼らの思想的立場は真逆にあると、相互に関連付けて論じようとしないのであれば、それはむしろ不自然なことではないか。

たしかに従来の研究で、陸九淵や陳亮の思想が論じられることは少なからずあつた³。けれどもこの両者を併せて取り上げようとするものは、ほとんどなかったように思われる。このような状況の中でホイット・ティルマン氏は、その著において陸九淵、陳亮の思想（及び彼らと朱熹との論争）の精密な分析を行っている。けれども陸九淵と陳亮の両者は、いずれも朱熹の道学内部における排斥を意識しながらも、そこには大きな観念の違いがあつたとまとめられるのみであつた⁴。

それに対して、筆者はこれまで陸九淵と陳亮双方の思想について、いくらか研究を進めてきた⁵。本稿では、筆者自身のこれらの成果を随時踏まえつつ、陸九淵と陳亮両者の思想における発想の共通性を明らかにしてみたい。

2. 陸九淵の心と理、陳亮の道

前述の通り、陸九淵は一般に、自らの心の内面に傾斜した思想家であつたと考えられる。例えば陸九淵は、心について以下のように述べている。

人の心はこの上なく靈妙で、この理はこの上なく精明である。人は皆この心を持ち、心には皆この理が備わっている。

〔人心至靈、此理至明。人皆有是心、心皆具是理。〕『象山全集』卷二二、「雜說」一三／273頁

ここでは人は誰しも靈妙なる心や理を備えていることが説かれている。さらに陸九淵は、

「四方上下を宇と曰ひ、往古來今を宙と曰ふ」と言う。宇宙はすなわち我が心、我が心はすなわち宇宙である。千万世の前に聖人が現れるも、この心、この理は同じである。

千万世の後に聖人が現れるも、この心、この理は同じである。東西南北の世界に聖人が現れるも、この心、この理は同じである。〔四方上下曰宇、往古來今曰宙。宇宙便是吾心、吾心即是宇宙。千万世之前、有聖人出焉、同此心同此理也。千万世之後、有聖人出焉、同此心同此理也。東西南北海有聖人出焉、同此心同此理也。〕『象山全集』卷二二、「雜說」一

一／273頁

などと、人の持つ心や理は、時間空間を越えて普遍であり、それゆえ聖人のものとも同一であるという。このように陸九淵は、精妙なる心や理を聖人の専有物とせず、人誰しもが等しく存するものであるとする。

一方陳亮は、歴史や現実問題に強く関心を示したとされる。

とりわけ淳熙九年（一一八二）よりおよそ二年にわたり、漢代唐代の為政者達への評価をめぐる、幾通もの書簡をもって朱熹を論難した。例えば陳亮は朱熹に対して、

三代は道によって天下を統治し、漢代唐代は智力によって天下を把持したと言つては、もとより人を納得させられない。しかし近頃の諸儒らは、三代には専ら天理が、漢代唐代には専ら人欲が行われ、そこに天理と暗合する（偶然に一致する）ところがあつたので、長久たることができただといふ。この説を信じるならば、（三代以後）千五百年の間、天地は漏れを繕つて時を過ごし、人心はぼろを補つて日を送つていたことになる。こんなことでどうして万物は盛んに、道は常に存していることにならうか。「謂三代以道治天下、漢唐以智力把持天下、其說固已不能使人心服。而近世諸儒、遂謂三代專以天理行、漢唐專以人慾行、其間有与天理暗合者、是以亦能長久。信斯言也、千五百年之間、天地亦是架漏過時、而人心亦是牽補度日、万物何以阜蕃、而道何以常存乎。」『陳亮集』増訂本・卷二八、「答朱元晦秘書」四・甲辰秋書／下・340頁

と、漢代唐代の為政者らの功績を暗合（偶然の一致）とする見解に反対する姿勢を取る。またそこでの議論を総括して、朋友陳傅良（君舉）には、以下のように述べている。

私（亮）が朱熹（元晦）と論争したのは、もとより三代や漢代唐代のためではない。この道が天地の間にあつて、眩い星や月のようなことを明らかにしたかったのである。「亮与朱元晦所論、本非為三代漢唐設、且欲明此道在天地間如明星皎月。」『陳亮集』増訂本・卷二九、「与陳君舉」一

／下・390頁

ここで陳亮は、道は天に輝く星月の如く、いついかなる時代においても存在し続けていると考える。要するに、三代の聖賢のみならず、漢代唐代の為政者らの統治も道に拠るものだと見なしているわけである。言い換えれば陳亮は、道を三代の聖人達のみ限定することを避けているのであり、これは前述した陸九淵の心や理に対する見方と共通する。

もちろん朱熹も理屈の上では、道は通時代的なものであるととらえていた。たしかに朱熹は、道に三代と漢代唐代との区別がないと、はっきりと述べている。

いったい人は人であり、道は道である。どうしてそこに三代と漢代唐代との区別があるというのだ。「夫人只是這箇人、道只是這箇道、豈有三代漢唐之別。」『朱子文集』卷三六、「答陳同甫」八／三・1600頁

しかし周知の如く『中庸章句』序を始め、堯舜以来の道統の伝が孟子以後断絶したとは、たびたび明言されるところであるし、儒者の学が伝わらず、堯、舜、禹、文王、武王以来、継承されていた心が天下に明らかではなくなり、それゆえ漢代唐代の君主らには、暗合（偶然の一致）する時がないではなかったが、総じて利欲のうちにあつた。これが堯、舜、三代は自ずから堯、舜、三代、漢の高祖や唐の太宗は自ずから漢の高祖や唐の太宗で、結局一つにできない理由である。「以儒者之学不伝、而堯舜禹湯文武以来転相授受之心不明於天下、故漢唐之君雖或不能無暗合之時、而其全体却只在利欲上。此其所以堯舜三代自堯舜三代、漢祖唐宗自漢祖唐宗、終不能合而為一也。」同前／三・1600頁

などと、ましてや漢代唐代の為政者らに、堯舜以来の道や心が継承されていると見ることはなかった。

ところで垣内景子氏に拠れば、朱熹はその修養論の性質上、人間を聖人と非聖人の中間に位置付け、聖人到達を軽々しく口にするこの危険性を警戒した。学問修養は「終わってはならない」のであり、そのため学ぶ者は聖人になったとは表明しない。このような立場から、朱熹は禪や陸学を執拗に批判したのだという。陸九淵として学問修養の不要を説いたわけではないが、聖人と自らの心や理の一貫性を言ってしまったのは、我々人間と聖人との境界が曖昧になり、たしかに聖人に至るべく学問修養をする意味が見出し難くはなる。

それに対して陳亮もまた、三代の聖人と漢代唐代の為政者らに貫通する道をいう。これもまた陸九淵と形は異なるものの、聖人との境界を脅かす議論となろう。例えば朱熹は、陳亮の見解を一言で、

貴方のお教えには云々あるが、概して言えば、漢代唐代を尊崇して三代と異ならないとするか、三代を貶損して漢代唐代と異ならないとするか、ただそれだけである。〔来教云云其說雖多、然其大概不過推尊漢唐以為与三代不異、貶抑三代以為与漢唐不殊。〕同前／＼三・159頁

とまとめ、古の三代の聖賢と、後の漢代唐代の為政者らとの同一視であるとする。このように陸九淵と陳亮は、あるいは自らの心の内面へ、あるいは歴代為政者らへと、異なる興味関心を示すが、そこに結果として、聖人と我々後世の人間との距離を狭めていく、少なくともそのように見られても仕方のない発想を持っていった点は同一であると言える。そしてこれこそ陸九淵、

陳亮双方のいずれにも朱熹との軋轢が生じた原因であり、この点に着目するならば、朱熹の陳亮批判は、その陸九淵批判と同様の枠組みで説明し得るのである。

3. 聖人との一貫性を言うことの効果

以上簡単ではあるが、陸九淵と陳亮の思想について、とりわけ心や理、道といった概念に着目して分析してきた。両者は自らも、もしくは歴代為政者らが、心や理、道において聖人と貫通していることを主張したため、そこに結果として、聖人と後世の人間との距離を狭めていく性格が窺えたのである。そこでいま一つ問題としたいのは、彼らが聖人との一貫性を説いたそもその理由である。両者がそれを言うことによつて目論んだ効果は何であったのか、さらに考察を加えていきたい。

まずは陸九淵について検討する。以下は、陸九淵が『論語』述而篇「道に志し、徳に拠り、仁に依り、芸に遊ぶ」句を解釈した箇所である。

聖人の為すところについて、そもそも常人は尽く為すこと
はできないが、また為すところもある。聖人の為さないところについて、そもそも常人は皆まで為さないことはできないが、また為さないところもある。聖人の為すところを
為し、聖人の為さないところを為さないということを考
え、我々は皆天地の中を受け、一心の靈に根ざして、滅
ぼし得ないものである。〔聖人之所為、常人固不能為、然
亦有為之者。聖人之所不為、常人固不能皆不為、然亦有不
為者。於其為聖人之所為、与不為聖人之所不為者觀之、則

皆受天地之中、根一心之靈、而不能泯滅者也。』『象山全集』
卷二一、「論語說」／264頁

前述の通り陸九淵は、人は誰しも聖人と同じく、靈妙なる心や理を備えていたと考えていた。けれどもこの箇所を見る限り、人は常に聖人と同様の行動を取れるわけではない。けれども時として聖人と同様の行動を取り得ることもあるが故に、その点をもって心は靈妙であると見なされるわけである。また同じ箇所陸九淵は、いくらか具体的に以下のようにも述べている。

道は天下万世の公理であり、人々が共に由るところである。君主には君主の、臣下には臣下の、父には父の、子には子の道があり、道のないところなどない。ただ聖人のみこれらの道を備え、故に君主となつては君主の道を、臣下となつては臣下の道を、父となつては父の道を、子となつては子の道を尽くし、いかなる場面にも道を尽くさないことはない。常人はそもそも道を備えないが、けれども尽くす道を失ってしまうこともない。〔道者、天下万世之公理、而斯人之所共由者也。君有君道、臣有臣道、父有父道、子有子道、莫不有道。惟聖人惟能備道、故為君尽君道、為臣尽臣道、為父尽父道、為子尽子道、無所處而不尽其道。常人固不能備道、亦豈能尽亡其道。〕同前／263頁

ここではまず道が天下万世の公理、人の共に由るところであると説明される。けれども続いてこの道は、聖人のみが常に備え得るのだという。我々常人は例えば臣として、例えば父としてといった現実の様々な場面において、時に道を踏み外すこともあるというのである。

とはいえ、また例えば『論語』学而篇には「弟子入りては則

ち孝、出でては則ち弟（悌）」とあり、『孟子』尽心篇上には「孩提の童、其の親を愛するを知らざる無く、其の長ずるに及ぶや、其の兄を敬ふを知らざる無し」などがある。これらの句を陸九淵はしばしば用いるが、例えば親を前にして、子としての孝を尽くすことなどは、聖人でなくとも誰しもが、容易になし得るはずの道となる。それゆえ陸九淵は、尽くす道を失うこともあり得ないと言っているのである。これを要するに、我々常人は実際に現実として、聖人の如く道に沿うこともあれば、そこから外れることもある。当然と言えば当然のことであるが、陸九淵ははっきりとこのことを理解していたわけである。

そこで改めて、陸九淵が自らと聖人との心や理における一貫性を説いたことを考えると、それは日常の様々な場面を想定した上で、そのうちの我々が道に沿うこともあるという限られた場面を切り出しているのだとも言える。それゆえ自ずとそれ以外の多くの場面においては、我々は道から外れているという事実を意識を向けることにも繋がる。例えば陸九淵は、

道は宇宙にあつて、どうして病弊があるだろうか。ただ人が自ら病んでいるだけである。古の聖賢はこの病いを取り除くのみで、どうして道を増減することがあるだろうか。

〔道在宇宙間、何嘗有病、但人自有病。千古聖賢只去人病如何増損得道。〕『象山全集』卷三四、「語録」上・2条、傳子雲録／395頁

道は大なるものだが、人が自ら小さなものとしている。道は公なるものだが、人が自ら私している。道は広々としたものだが、人が自ら狭めている。〔道大、人自小之。道公、人自私之。道広、人自狭之。〕『象山全集』卷三五、「語録」

下・98条、包揚録／448頁

などと、人が道を病み、狹めていることを言う。これらは我々常人が道を踏み外していることに着目した発言であると言えるであろう。

たしかに朱熹の言う通り、(たとえそれが限定的であったとしても)自らと聖人との一貫性を言ってしまうては、両者の境界が曖昧になり、聖人に至るべく学問修養をする意味が見出し難くなる。けれども陸九淵に言わせれば、あえて聖人との一貫性を言うことで、そうとはならない他の多くの場面を浮き彫りにする。さらに言えば聖人と我々常人との差異をかえって明確化させる狙いがあったのだと思われる。

一方陳亮も、歴代為政者らと三代の聖賢達との道における一貫性を説いたが、実際には歴史上のあらゆる為政者が三代の聖賢達のような統治を行っていたとは考えていなかった。

曹操(孟徳)の本領が一たび偏ると、天下を把持するも安定せず、成功と失敗とが相次いで起こり、一向に手の施しようがなかった。ここには専ら人欲が行われていたのであり、その間に成功があったとしても、それは僅かな天理が行われたに過ぎないのである。諸儒の(三代には専ら天理が、漢唐には専ら人欲が行われたという)議論は、曹操やそれにも及ばない人物らに対して言われるのならば正しいが、漢代唐代の全てに当てはめるといふならば、その間違いは甚だしい。漢の高祖や唐の太宗らも、あの世で心服できるはずがない。〔曹孟徳本領一有躋歛、便把捉天下不定、成敗相尋、更無着手処。此却是專以人欲行、而其間或能有成者、有分毫天理行乎其間也。諸儒之論、為曹孟徳以下諸

人設可也、以斷漢唐、豈不冤哉。高祖太宗豈能心服於冥冥乎。』『陳亮集』増訂本・卷二八、「答朱元晦秘書」四・甲辰秋書／下・340頁

周知の如く陳亮は、漢の高祖や唐の太宗らを絶賛した。彼らはたしかに三代の聖賢達の如く、天理に沿った統治を行っていたのである。けれども例えば、右のように魏の武帝(曹操)などに対しては、手厳しい評価を下すこととなる。さらに陳亮は、

といった喜怒哀楽愛悪は、天地より形を受けたものに、色(外物)の影響が伴って生じるものである。この(喜怒哀楽愛悪の)六者は、その正しきを得れば道となり、正しきを失えば欲となる。とりわけ君主はこの上ない地位にあり、この上ない権勢を奮っており、目や心は外物とともに交わり、自らの喜怒哀楽愛悪の取り方も、一定であるわけにはいかない。あらゆる事態が逐一正しきを得ているとの保証もできないであろう。〔夫喜怒哀楽愛悪、所以成形於天地而被色而生者也。六者得其正則為道、失其正則為欲。而況人君居得致之位、操可致之勢、目与物接、心与事俱、其所以取吾之喜怒哀楽愛悪者、不一端也。安能保事事物物之得其正哉。』『陳亮集』増訂本・卷九、「勉彊行道大有功」／上・101頁

と云い、とりわけ人の上に立つ為政者は自らの持つ地位や権力に翻弄され、道(ここでは喜怒哀楽愛悪の感情を正しく發揮することだと説明される)に沿った統治を行うことは困難であると指摘する。すなわち陳亮は、歴代為政者らの多くは道を踏み外した暴君であり、道に適った賢帝の方がかえって稀であると認めていた。実際の歴史を鑑みれば当然のことではあるが、

陳亮ははっきりとこの事実を受け止めていたのである。

さてそこであえて道の通時代性を説くことは、いついかなる時代においても道に合致した統治は、可能性としてはあり得たはずであるという前提を立てることとなる。とはいえあらゆる為政者がそれに合致していたとも到底言えないので、結局のところ、三代以後の歴代為政者一人一人について、その統治が道に適っているか否かを確認する作業が必要となる。陳亮の残した膨大な歴史著述は、このような意図の下に記されたのである。かくして道を踏み外した暴君らの統治は白日の下に晒される。例えば秦の始皇帝については、

秦（の始皇帝）は智力によつて天下を抑えて君主となり、古を師とせず（その政権を）万世に伝えようとしたが、天下のものは皆朝廷を蔑視して、翻つて篡奪しようとい、一度その勢力がなくなると、田夫野人までもが皆天子王公を自称しようといふ心を持った。「秦以智力兼天下而君之、不師古始、而欲伝之万世、使天下皆疾視其上、翻然欲奪而取之、勢力一去、則田野小夫皆有南面称孤之心。」『陳亮集』増訂本・巻三、「問答」上／上・33頁

と、その自らの権勢を頼りに古を無みしたことが批判される。また漢の武帝については、

（漢の）武帝は雄大たる才能知略を奮っていたが、名声や色欲、貨幣や利益の間にふらふらとして、日頃の様々な事態にあまねく対処したが、恐懼警戒することを知らずに、どこへいっても憂患がないわけにはいかなかった。武帝は功績を上げることが大いに喜んだが、勉めて学問をし、正心誠意を表れとして發揮して、その広大さ深淵さを露わに

することも知らずにいるという。「武帝奮其雄材大略、而從容於声色貨利之境、以泛応乎一日万幾之繁、而不知懼慙焉、何往而非患也。説者以為、武帝好大喜功、而不知疆勉学問、正心誠意以從事乎形器之表、溥博淵泉而後出之。」『陳亮集』増訂本・巻九、「勉彊行道大有功」／上・101頁

と、その才能知略が評価されるものの、声色貨利に惑わされたとして非難されている。

要するに陳亮が道の通時代性を説いた効果は、それを言うことにより、三代以後の歴代為政者らの統治を逐一具体的に確認することへの意味を見出す。そしてこのような確認作業を経て、道に適った統治を行った賢帝を明らかにするとともに、かえってそれを踏み外した暴君を浮き彫りにさせるといふものであったといえよう。

4. むすび

陸九淵と陳亮は、あるいは自らが、あるいは歴代為政者らが、心や理、道において古の聖人と貫通していることを主張した。

両者はたしかに自らの内面、外界の事象（歴史上の出来事）という全く異なる興味関心を示したわけだが、ともに結果として古の聖人と後世の人間との距離を狭めていく、少なくともそう思われても仕方のない発想を持っていた。本稿冒頭で述べた通り、陸九淵と陳亮はほぼ同時期に朱熹と論争を繰り広げたが、朱熹の立場にたてば、両者はともに到達すべき聖人の地位を脅かすものとされていたのであろう。

とはいえ陸九淵とて、自らの心が聖人のそれと同一であり、

いついかなる時にも聖人と同じように完璧な行動を取れるとは考えていなかった。また陳亮とて、歴史上のあらゆる為政者が、三代の聖賢の如く道に即した統治を行っていたとも考えていなかった。陸九淵は自らの心には聖人と一致する部分とそうでない部分があり、それゆえ時として聖人の如き行動（例えば親に對する子としての孝）を取り得るが、また時として取り得ないこともあると言う。また陳亮は歴史上、三代の聖賢の如く道に適った統治を行った賢帝もいたが、またそれを踏み外した暴君もいたという。これらは至極当然な理解であると言えるが、このような当たり前の前提を認めた上で、あえて古の聖人との一貫性を説くならば、それは自らの聖人と一致する限られた行為、聖賢の如き統治を行った限られた為政者を、全体の中から摘出することとなる。そしてそのためには、様々な行為、様々な為政者らの統治に対して、逐一聖人のものと一致するか否かを確認していく作業が必要となる。陸九淵や陳亮が、聖人との一貫性を言うことで目論んだ効果は、以上のような作業を自ずと取らせることにあり、さらに言えば、かえって道から外れた自らの行動を、道を踏み損ねた歴代為政者らの統治を浮き彫りにし、そこに意識を先鋭化させることにはあったのではないであろうか。

言葉を換えれば、陸九淵と陳亮が、自らや歴代為政者らと聖人との一貫性を言ったのは、あくまで部分的、限定的な状況に限ったことであつた。聖人との差異を確保するために、それを限定的に言うことすら拒んだのが朱熹であり、限定的に言うがゆえに、かえって全体としての聖人との差異を明らかにさせたのが陸九淵や陳亮であつたということにもなるであろう。

注

- 1 『朱子語類』卷一二三・21条（鄭可学録）「陳同父学已行到江西」〔八・296頁〕。
- 2 錢明氏「二〇一〇」。また既に島田虔次氏「一九六六」、のち「二〇〇二」（402頁）にも若干の指摘がある。
- 3 本稿末尾の参考文献の一覧に、その主たるものを挙げた。
- 4 Hoyt Cleveland Tillman（田浩）氏「一九九二」、中文増訂版「二〇〇八」（40頁）。
- 5 陸九淵については、拙稿「二〇〇八a」、「二〇一〇」、「二〇一一」。陳亮については、拙稿「二〇〇八b」がある。
- 6 垣内景子氏「一九九八」、のち「二〇〇五」（212頁）。
- 7 陸九淵は、むしろ積極的に、講学（集団学習）や読書といった学問修養の必要を説く（拙稿「二〇〇八a」、「二〇一〇」）。
- 8 『象山全集』卷一、「与曾宅之」（5頁）、卷一九、「貴溪重修県学記」（237頁）など。拙稿「二〇一〇」を参照。

参考文献

【一次資料】

* 以下の資料の引用に際しては、適宜句読点等の符号を改め、また基本的に新字体で統一した。

『朱子文集』

（郭齊・尹波点校『朱熹集』、四川教育出版社、一九九六年一〇月）

『朱子語類』

（王星賢点校、中華書局、一九九四年三月）

『象山全集』

(鍾哲点校『陸九淵集』、中華書局、一九八〇年一月)

鄧広銘点校、中華書局、一九八七年八月)

『陳亮集』増訂本

吉田公平〔一九九〇〕

〔陸象山と王陽明〕(研文出版、一九九〇年一月)

年八月)

Hoyt Cleveland Tillman

(中華書局、一九九二年四月)
『陸象山と王陽明』(研文出版、一九九〇年一月)
Utilitarian Confucianism Chen Liang's challenge to Chu Hsi (Harvard University Press, 1982) (姜長蘇訳)

【研究書・研究論文】(敬称略)

垣内景子〔一九九八〕

「聖人可学」をめぐる朱熹と王陽明

——聖人にならなかつた朱熹と聖人

になつた王陽明」(『日本中国学会創立五十周年記念論文集』、汲古書院、一九九八年一〇月)

「心」と「理」をめぐる朱熹思想構造の研究」(汲古書院、二〇〇五年八月)

「楊慈湖」(『東洋史研究』二四・4、一九六六年三月)

「中国思想史の研究」(京都大学学術出版部、二〇〇二年三月)

『中国哲学史学逍遙』(角川書店、一九九三年一月)

『即今自立の哲学 陸九淵心学再考』(研文出版、二〇〇六年十二月)

「浙学」の呼称とその系譜」(久米祐子訳)(『京都産業大学論集・人文科学系列』四二、二〇一〇年三月)

『走向心学之道 陸象山思想的足跡』

張立文〔一九九二〕

錢 明〔二〇一〇〕

小路口聡〔二〇〇六〕

庄司莊一〔一九九三〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

中 嶋 諒

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

——〔二〇〇五〕

拙 稿〔二〇〇八 a〕

——〔二〇〇八 b〕

——〔二〇〇八 b〕

——〔二〇〇八 b〕

——〔二〇〇八 b〕

——〔二〇〇八 b〕

——〔二〇〇八 b〕

——〔二〇〇八 b〕

——〔二〇〇八 b〕

——〔二〇〇八 b〕

——〔二〇〇八 b〕

——〔二〇〇八 b〕

——〔二〇〇八 b〕

Abstract

This paper focuses on the philosophies of Lu Jiuyuan and Chen Liang, who were philosophers in China during the Southern Song Dynasty and were controversial regarding Zhu Xi at this same time. In previous studies, the connection between Lu Jiuyuan and Chen Liang, who have diametrically opposed philosophies with emphasis on the inner face of one's own mind and the events of the external world had not been discussed. This paper reveals that they both emphasized the consistency of the world for posterity with the ancient Sages such as Yao, Shun and Confucius by focusing on the ideas of Xin (mind), Li (principle) and Dao (path). These were regarded as universal and diachronic, the Sages also had equally. Consequently, the boundary between the Sages and the world for posterity has become ambiguous and the importance for the disciplines has faded. Zhu Xi did not speak of the attainment of the Sage thoughtlessly; therefore his conflict with Lu Jiuyuan and Chen Liang occurred. Lu Jiuyuan and Chen Liang have similar ideas that emphasized the consistency of Xin, Li and Dao, because the effect of sharpening consciousness strayed away from these. Although interest was shown by both as different, there were common underlying themes in their philosophies.